知的障害特別支援学校高等部における
ライフキャリアに関する教育実践
－保護者ニーズから汲み取る子ども理解の有用性－

学 籍 番 号２１９２１３
氏　　名　丹沢　正太
主指導教員　平井　美幸
副指導教員　梅川　康治

第１章　緒言

知的障害特別支援学校に在籍している子どもたちが、高等部を卒業する移行期において、個々の将来の自立と社会参加に向けて自分なりに自己のキャリア形成をどのように実現し、卒業後の長い人生を考えた子どもの「めざす将来像」について未来の自分の姿をどうイメージできるのかを支援することが必要であると考える。社会で生きていくなかで支援を必要としながら、楽しさや幸福感を味わえるような人生の充実には、在学時に、学校教育のなかでライフキャリアの概念を取り入れたキャリア教育の視点をもって指導・支援する必要がある。

その考えを踏まえ、知的障害特別支援学校の教員として、地域での適応や自己実現、QOL の向上を目標とした子どものニーズにそった指導・支援のあり方としてどのような手立てが必要であるのか、そのめざす姿への具体的な支援や目標に向かうためには、一番の理解者で支援者でもある保護者の意向や思いを汲み取ることが、子ども理解を深める重要な手がかりになる。

そこで本実践課題研究では、知的障害Ａ特別支援学校高等部におけるライフキャリアに関する教育実践として、移行支援計画に位置づくライフキャリアの概念を取り入れたキャリア教育の指導・支援の充実をめざし、保護者ニーズに着目した移行期における教育支援を検討・考察することを目的とした。

第２章　保護者ニーズに着目した移行期の教育支援

本章では、知的障害Ａ特別支援学校高等部３年生に対する子どもの「めざす将来像」をとらえた移行支援を検討するため、高等部卒業を控える子どもの保護者ニーズを明らかにすることを目的に、対象者の保護者８名より独自の自己記入式質問紙を用いて自由記述の回答を得た。

子どもの発育・発達の成長過程ならびに高等部卒業後の子どもの「めざす将来像」についての保護者のニーズを把握するためSCATによる質的分析を行い、高等部卒業を控えた保護者ニーズからみた子どもの「めざす将来像」が示された。ストーリー・ラインから読み解く子どもの将来に対しては、継続的な支援者による自立支援を望む保護者の意向や、子どもが社会適応しながら自分らしい生き方や豊かで充実した生活から自己実現を望む保護者の思いなどが含まれていると考えられた。

移行期の教育支援として、個々の障害特性を把握し、将来の子どもの進路や卒業後の姿を具体的に指導・支援していくことには、知的障害特別支援学校の教員として子どもを「学校から社会」へとつなげるキーパーソンとして、保護者ニーズをとらえた教員の果たす役割はとても大きいことが考えられる。移行支援計画に基づくライフキャリアの概念を取り入れたキャリア教育としての授業実践を展開していく必要性の示唆が得られた。

第３章　移行支援計画に基づく授業実践

本章では、知的障害Ａ特別支援学校高等部３年生に対する子どもの「めざす将来像」を移行支援計画に位置付けた、キャリア教育としての授業実践を評価することを目的とした。

移行支援計画に基づく授業実践からは、子どもが「めざす将来像」として授業に取り組む様子や将来の夢を真剣に考える姿などから、子ども自身が卒業の現実をそれぞれの感性で受け止めながら、卒業後の生活やそれぞれの夢、余暇活動の充実など、自己実現に向けての準備段階としてそれぞれの進路先や社会へと移行するためのライフプランを形成する手がかりとなったと考えられる。

移行支援に位置づく授業実践の評価として、対象者である保護者から移行支援計画に基づく教育実践ついて、授業実践前、授業実践後、卒業４カ月後に行った計３回の質問紙調査より得られたデータにSCATによる質的分析を行った結果、移行期における段階的なストーリー・ラインにおいて保護者からみた子どもの姿の変化が示された。生活自立の芽生えや自分の好きなことを自己選択、自己決定する場面がみられるなど、自分らしく生活する様子を思い見守る保護者の子どもをみる姿があり、それぞれが自分なりに支援を頼りながら生きている姿を保護者はみていたことなど、移行期における子どものライフキャリアの変容として考えられた。

授業実践を通して、保護者からみる子どもの「めざす将来像」には変容をとらえられたことからも、保護者ニーズを丁寧に汲み取り指導・支援の展開を踏まえることが、子ども理解の深層に迫ることができる教育的アプローチの一つであると考えられ、生徒の個々の障害特性や実態に合わせた、子どもの「めざす将来像」に向けたライフキャリアという概念に着目した移行支援計画に基づくキャリア教育として授業実践を展開していく必要性の示唆が得られた。

第４章　成果及び課題

保護者からみる子どもの「めざす将来像」について教育実践を検討したことから、子どもの成長過程を踏まえることで、学校教育段階終盤にある子どものめざす姿として、それぞれが特性に応じた自己理解や地域での適応、自立する姿が考えられた。保護者ニーズを移行支援計画に位置付けたライフキャリアの概念を取り入れたキャリア教育の授業実践からは、自分らしく卒業後の豊かな生活やライフプランを形成する手がかりとなり、子どもの「めざす将来像」に向けての変容をとらえたことから、保護者ニーズを汲み取ることは子ども理解に有用性があるものとして考えられた。

よって、子どもの「めざす将来像」には保護者の意向や思いを汲み取るニーズを反映させた移行支援計画に基づく授業実践の必要性の示唆が得られた。

しかし、課題として、知的障害Ａ特別支援学校高等部を卒業してからの追指導として、４カ月後のライフキャリアの概念を取り入れた移行支援計画の現状把握の分析や計画の修正などが、十分に検討できていない部分がある。また、人事異動等による自校との切れ目が生じることについて、本実践課題研究の取り組みとしての限界がみられる。

第５章　結論

知的障害特別支援学校高等部におけるライフキャリアに関する教育実践においては、子どもが「めざす将来像」として保護者ニーズを汲み取った包括的な移行支援計画の立案と実践が、今後の特別支援教育のキャリア教育の一端となることが考えられた。

本実践課題研究の教育実践が、特別支援学校の学校教育段階の終盤にあたる知的障害特別支援学校高等部の移行支援に関連するすべての教育活動の具体的な見直しを図るきっかけとなり、その実践を省察することで「子どもから大人」へ、「学校から社会」へとつなぐ有効な実践的知見として一助になることが期待される。